



題字 高校第十六回生の佐藤美佐子さん
(旧姓田代)の筆になるものです。

本と図書館と私

中林 恭子 (大学准教授)

本は日々の生活に欠かせないものである。どこへ行くにも必ず、本を携えている。「もしも、無人島に行く時に、ひとつだけ持って行けるとしたら、何を選ぶか」と問われたら、迷わずに「本」と応えるであろう。ただし、一冊の本を選ぶのは至難の業であるが。

仕事に関する専門書も読むが、わずかな時を惜しんで小説や新書、漫画等の依存症かもしれない。

物心ついてから、本を読むのは好きだったし、小学生の頃から学校の図書室によく通った。

本好きな者にとって、図書館は最高に居心地の良い場所である。図書館に行くとき、イライラしていても気持ちが落ち着くし、気持ちが沈んでいても、本に囲まれると、わくわくしてテンションが上がる。

そのような場所に居たくて、高校生の時は希望して図書委員を務め、喜々として貸出業務を行ったり、本の整理をしたものだ。

瀬木学園の図書館は職員の方が発行しているが、私の母校では図書委員の仕事であった。私は編集委員長として図書館報を作成したことがある。編集委員会が決定したテーマは「作家と自殺」だった。当時、有名作家の自殺が世間を騒然とさせ、マスコミにもセンセーショナルに取り上げられていた。今にして思うと、学校はこのようなタイトルを何も言わずに許可してくれたものだ。

しかし、苦労したのは、先生方への原稿依頼だった。国語担当の先生方には、「難しいテーマなので、書けない」「自殺について書くべきではない」とにべもなく断られた。編集委員の伝手で書いてくれそうな先生方を説得したり、拝み倒して何とか原稿を引き受けていただいた。数学と美術の先生が引き受けてくださったと思う。図書館報が刷り上がった時、得も言われぬ達成感を味わうことができた。今となっては懐かしい思い出である。

最近の学生はあまり本を読まない。私たちの頃には必読書とされた「アルプスの少女ハイジ」「秘密の花園」な

どの子ども向けの名作も読んでいない。この二作品には車椅子に乗る少女と少年が登場するが、二人とも歩けるようになる。失立、失歩という心因性の症状の例として授業の中で取り上げるが、知らないと言われてしまう。そのような学生に本を読むことの意義を伝えたい。まず、本を読むと、世界が広がる。知らない世界を知ること、自分とは異なる視点を得ることができ、ものの見方が広がる。例えば、障がい関連の本を読めば、障がいのある方の豊かな世界が理解できたり、想いが分かったりして、見方が変わるかも

しれない。そうならば、障がいのある方がいなくなれば良いというような短絡的な発想には結びつかないだろう。また、本を読むと、人のところが分かるようになる。心理描写を読んだり、主人公の気持ちに共感することで、感情の起伏や心のあり様が分かる。心理学の格好のテキストである。私は仕事の一つとして、物語の心理的分析を行っているが、分析をしなくてもできる。人のところに興味があったり、心理学を学びたかったり、心理職に就きたいと希望する方には、できるだけ多くの本を読むことをお勧めする。

さらに、人生が変わるような出会いもある。私は高校生の時に河合隼雄著「コンプレックス」を読み、心理学を学ぶことを決めた。それが、臨床心理士として働き、大学で教鞭をとる現在へと導いてくれた。もしも、その本に出合っていなかったら、私の人生はどのようなになっていたのだろうか。

瀬木学園図書館には多くの書物があり、まさに宝の山である。その中から、自分にとって価値のある一冊を選び、ぜひ読んで欲しい。本の扉をめくると、あなたの未来が開かれるかもしれない。

ここで、私の座右の書の一冊である『What I wish I knew when I was 20』について紹介したい。著者はスタンフォード大学で起業家理念やイノベーションを教えるティナ・シーリグで、この本は六年前に発売された。大学生の時にこの本に出会い、決して起業家になりたいわけではなかったが、少なからず影響を受けた。特に印象に残っているのは「スタンフォードの学生売ります」という題の章だ。スタンフォード大学とは世界大学ランキングで第三位に入るほどの実力校だ。この章はいくつかの課題に学生たちがどのような答えを導き出したか実際に例を挙げて説明している。例えば、「これから五日間、封筒を開けてから四時間の間に、クリップ十個を使って、できるだけ多くの価値を生み出さない(価値はどんな方法で測っても構わない)」という課題だ。これは赤いクリップ一個から物々交換を重ねて一軒の家を手に入れたカイル・マクドナルドの話とヒントになっている。著者が一番面白いと思ったチームは、まずクリップをポスター・ボードと交換し、この章のタイトルにもなっている「スタンフォードの学生売ります(一人買えば、二人はおまけ)」と書いてシヨッピングセンターに立ってかけたのだ。重い荷物を持って欲しいという依頼から、仕事で行き詰まっていた人からのアイデア提供依頼まであり、後者はお札にパソコンもくれたそうだ。「可能性は無限大」だと思った。この本を通して学んだことは、失敗することを恐れず、快適な場所から離れ、あらゆることに挑戦することで様々な可能性が広がるということだ。私が日本の快適な家を離れ、カナダであらゆることに挑戦してみようと思えたのもこの本のおかげなのかもしれない。たった一冊の本にも読者の人生を左右する力がある。今後皆さんが素晴らしい本に出会えることを切に願う。

図書館フェア 2016

7月4日～7日に図書館フェアを開催しました。毎年恒例の新着本展示、七夕飾りのほかに、企画展示を行いました。また、「ポターと若沖になったつもり塗り絵大会」や「若沖ミラクルワールド」上映会を行い、最終日には図書カード抽選会で盛り上がり、幕を閉じました。



【そろばんの世界】

高校に商業科があること、ドラマの影響でブームになったことをふまえて企画しました。そろばんは室町時代の後半に日本に伝えられ現在に至っています。経済が発達した江戸時代に、農民や町人が基礎的な計算能力が必要となり、そろばん技術が浸透していきました。ねずみ算や油わけ算、そろばん指南などの図会と一緒に解説展示しました。



【ピートルクス・ポター生誕 150年】

ポターは1866年ロンドンで生まれました。「ピーター・ラビット」誕生のきっかけは友人の息子に宛てた絵手紙でした。その絵に色付けをして、1902年「ピーター・ラビットのおはなし」として出版されました。この絵本シリーズは100年以上経った今でも愛され続けています。『ピーターラビットの絵本』全24巻と、登場するキャラクターの紹介などを展示しました。



【伊藤若冲生誕 300年】

若沖は1716年、京都・錦小路で生まれました。幼少の頃から絵を好み初めに狩野派を学びました。後に中国の花鳥画を数多く模写し、琳派の装飾画風を研究しました。実物写生の重要性を認識し、独自の花鳥画の世界をひらきました。有名な『動植図』や、若沖の生涯略図を蔵書と共に所狭しと展示しました。



一書との出会い

河田 菜々 (高校 英語科)

「学びとはなんなのか」「この本をあるおとなに捧げて書くことを、子どもたちに許してほしいと思う。」「吾輩は猫である。名前はまだない。」「春が二階から落ちてきた。」「真っ赤な嘘とい

うけれど、嘘に色があるならば薔薇色の嘘をつきたいと思う。」本の冒頭は作者の渾身の一文であることは確かだ。私は読む本を選ぶ時、必ず冒頭の一文を読む。それを読んで続きが読みたくなれば読むし、そうでなければ読まない。もともと本は好きだが、たくさん読むというタイプではなく、図書館や本屋で読みたくなる本に出会った時に熟読するタイプだ。

「二書の人を畏れよ」という言葉があるように、たくさん本を曖昧に読んで人よりも、たった一冊でも自分の座右の書を持つ人は、どんな時代や社会になっても困惑せずに自分の道を突き進んでいく力を持っている。これは参考書や単語帳においても似たようなことが言える。たくさん参考書や単語帳を買ってすべてを曖昧に読んで勉強する人よりも、まずは一冊の参考書と単語帳を何度か繰り返し読む人のほうが知識は勝るし、様々な問題に対応できる力を持っている。

これは読み方に問題があり、もちろん